

## 始原東洋医学の立場から『身体症状』を如何にとらえるか

明治国際医療大学 基礎鍼灸学講座 渡邊勝之

本研究会における「身」および本シンポジウムにおける「身体」をどのように捉えるかにより、与えられたテーマである「身体症状」についての見解は当然、異なってくる。

著者は、約 30 年に渡り東洋医学を専門とする鍼灸師として、臨床・教育・研究に携わってきた。また、東西医学の融合・補完・統合を志してきたが、水と油の様に根本的に異なる、両医学をどのように統合すれば良いのか、漸く方向性が見えてきたように感じている。

東洋哲学・医学で使用している《身心》と西洋哲学・医学で使用している〈心身〉は、同じ言葉を使用しているが、最近になって、意味が異なることに気づいた。

東洋医学では、人体の三宝を“神気精”と呼称しており、一般的には“神を意識（心）”、“気をエネルギー”、“精を物質（身）”と理解していることが多い。故に、同じ“心”と“身”を、東洋では“気”が身心を仲介した《身心一如》として、他方、西洋では異なる実体として〈心身〉を二元的に捉え、観念論と唯物論が二大思想潮流になっていると思われる。

著者の立場は、絶対（空・潜象）なる《いのち》のハタラキである《気》が一気通貫しており、相対（色・現象）の時間的側面として《精神》が、空間的側面として《身体》を表現していると捉えている。よって、身心一如とは《いのち》が現象的に《身体＝精神》として現れている。他方、デカルトの「我思う、故に我あり」の言葉に象徴されているように、自我の観点から主観的に知性で捉えた思考の世界（意味・価値・解釈）を〈心〉、また客観的に悟性で捉えた物の世界を〈身〉と表現している。

すなわち、無我の無分節の立場に立てば《身心一如》となり、自我の分節の立場に立てば、〈心〉と〈身〉を分節して捉える〈心身二元論〉となる。

以上をまとめると、〈心〉を東洋では先天的な《精神》を意味し、西洋では後天的なく人間心〉を意味する。一方、〈身〉を東洋では全一的な《身体》を意味し、西洋は多元的なく物質〉を意味すると捉えている。

著者が実践している始原東洋医学（有川貞清創設）では、健康・病気・死を下記の様に捉えている。1. 健康とは、身体本来（細胞一つひとつ）のベクトルが統一した状態。2. 病気とは、統一の崩れた（局所の）ベクトル異常があり、それを本来のベクトルに沿うように変えようとする力（自然治癒力）が働いている状態。3. 死とは、方向性が崩れてそれを回復しようとしめない状態を意味している。

また、看護の先駆者である F. ナイチンゲールは『看護覚書』に「すべての病気は、その経過のどの時期をとっても、程度の差こそあれ、その性質は回復過程 (reparative process) であって、必ずしも苦痛をとまなうものではないのである。つまり病気とは、毒されたり (poisoning) 衰えたり (decay) する過程を癒そうとする自然の努力の現れであり、それは何週間も何ヶ月も、ときには何年も以前から気づかれずに始まっていて、このように進んできた以前からの過程の、そのときどきの結果として現れたのが病気という現象なのである」と記述している。

上記より、身体症状とは《いのち》のハタラキである、自然治癒力・自己治癒力・ホメオスタシスが働くことにより、本来の状態に戻ろうとする回復過程であると捉えている。

湯液も鍼灸も、自然治癒力のハタラキにより、病体において一人ひとり異なって発現する、“気滞・経絡・強力反応点”を解消することにより、自然治癒力が十全に働くための援助をしており、作用機序も同じであることから“湯液鍼灸作用同一論”を提唱している。